

『 祈る手 』

牧師 望月 達朗

右の絵は、画家のアルブレヒト・デューラーが描いた『祈る手』（1509年）という作品です。この作品が生まれたストーリーと共に、世界中の教会で長く愛され続けています。アルブレヒトと友人のハンスは、ドイツのニュルンベルクで暮らしていました。若い二人は絵が大好きで、いつかは本格的に学びたいと思っていました。しかし、貧しい二人にとってそれは遥かに遠い夢…。ある日、ハンスはアルブレヒトに提案します。「どちらかが先に勉強して、もう一人が働いてそれを支えればいい。君の方が絵は上手なんだから早く勉強が終わるだろう。だから、先に勉強しておくれ。わたしが働いて支えるから」。しかし、どちらが先に勉強に行くのかについては、お互い譲り合ってなかなか決まりません。そんな暫くのやりとりがあった後、最終的に、アルブレヒトはハンスの提案を感謝して受け、絵の勉強のためにイタリアのベネチアへ留学することになりました。1年が経ち、2年が経ってもなかなか勉強を終わりにできません。ハンスからはいつも、「気にせず納得するまで学んでくれ」という手紙が来て、学費を支えてくれました。それから数年が経ち、アルブレヒトはベネチアでも高い評価を得るようになって、ニュルンベルクに帰ります。しかし、久しぶりにハンスと再会した彼は、大きなショックを受けました。ハンスの手が働きすぎて、とても絵筆を握れない手になっていたからです。アルブレヒトは心を痛め、絵を描く気力を完全に失ってしまいました。そんなある日、アルブレヒトは、部屋で一人祈るハンスの声を漏れ聞きます。「主よ、アルブレヒトはわたしのことをとても気にしています。どうか、彼が自分を責めないように。彼が夢をかなえてくれますように」。その祈りを聞いたアルブレヒトに衝撃が走ります。そして、何かに突き動かされるようにしてハンスのもとに駆け寄り、「どうかハンス！君の手を描かせてほしい！」と願うのでした。その時に描かれたのが『祈る手』です（ハンスの手は、指がまっすぐ伸ばせず、手をぴったり合わせられていないことが分かります）。このハンスの祈りによって命の息吹を注がれたアルブレヒトは、再び新たな気持ちで絵を描き始め、多くの名作を世に遺していくこととなりました。



私達は誰かと握手をするとき、自分が握っている手は、同時に相手から握られているということが起こっています。そして、私が掴んでいる手の力より、相手の手の力の方が強いとき、たとえ私の力が弱まり、手を離しそうになったとしても、相手の手の力のなかでしっかりと捕らえられています。私が握る手の力の強さではなく、私の手を握ってくれる者の強さのなかに、沈んでしまった私の命が引き上げられるということがあるように思います。ハンスは知っていたのです。私達がどれだけ弱り果て、手を離そうとしても、永遠にその手を掴んで離さない方がいることを。それは、「わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」（ルカ福音書 22:32）と祈る主イエスの手です。イエスを裏切ってもなお、十字架の傷跡そのままに、「あなたがたに平和があるように」（ヨハネ福音書 20:21）と祝福を祈ってくださるキリストの手です。使徒パウロは、宣べ伝えました。「わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています。わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです」（ローマの信徒への手紙 8:37～39）。どんな自分の存在否定も通用しない相手が、私達の手を誰よりも強く握って離しません。

～私と聖書の言葉～



✠ 五代儀 文雄さん ✠

私は好きな言葉としてあげるなら、主の言葉をあげ、戒めを大切にして知恵に耳を傾け、英知に心向け、宝物を求め捜すなら畏れることを悟り、神を知ることに至達するであろうかと思えます。それがまた、知恵、知識、英知を与えてくれるかと思えます。正しく生きて行くための力を与え、完全な道を歩く人間のために盾を備え、裁きの道を守り、主は慈しみに生きている人たちを守ってくださることでしょう。そして人は正義と裁きと公平は、すべて幸いに導くと悟るでしょう。

今の政治家は何をやっているのか我々にはさっぱり分からない事が多いですね。一つの例として挙げるなら、栃木県の足尾銅山から流れ出る川の水に含まれている猛毒が野菜・稲等に入り、人間が食べることには不向きなことで、付近の農家の人

私たちは非常に苦労したようです。何とかその水の流れを変えて、少しでも猛毒が野菜・稲等に入らないように私財を投げ打って頑張った田中議員。闇の道を歩き、悪と暴言を楽しみとし、正しい人は他に住まいを得る戒めを心にしっかりと納めるならば、命の年月、生涯の日々は増し、平和が与えられることでしょう。「心を尽くして主に信頼し、自分の分別に頼らず、あなたを憎き者が飢えていたらパンを与え、渴いているなら水を飲ませなさい」。この言葉は簡単なように聞こえてきますけれど、大変難しい言葉で、簡単なことではないと思います。憎しみはごまかしても、その悪は会衆の中で露見する。鉄は鉄をもって研磨する。人はその友によって研磨されていくのだと思います。

✠✠ 小林 正子さん ✠✠

「ヒソプをもって、わたしを清めてください。わたしは清くなるでしょう。わたしを洗ってください。わたしは雪よりも白くなるでしょう。(詩篇 51 章 7 節 口語訳聖書)」

私が教会に行き始めた頃、会堂の後ろのテーブルに置いてあった葉のみ言葉です。私はとても人には言えない様な醜い心・考えが湧いてくるのを自覚していたので、このみ言葉がまぶしく、心が清く雪のように白くなったなら、どんなに素晴らしいかと思いました。教会に来ている人達は、心が清く、雪のように白く感じていました。いつも親切で、優しい人達でしたから。今も当時と変わらずの者ですが、主の十字架のあがないにより、主のものとされたことを感謝しています。

もう一つ好きなみ言葉は、詩篇 23 編 1～4 節です。「主は私の羊飼い、わたしには何も欠けることがない。主はわたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴い、魂を生き返らせてくださる。…死の陰の谷を行くときも、わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる」。このみ言葉に触れるとき、心に平安が与えられます。苦しい時、悲しい時、辛い時、いつも励まされ、勇気付けられました。私は自分では何もする事ができないのですが、主が私を養い守ってくださり、魂を生き返らせてくださること、何という幸いでしょう。順調な時、自分で出来るが高慢になり、失敗する事が多々あります。うまくいかない時、「主よ、助けてください!!」と自分勝手な祈りをする。そんな時にも、共にいてくださる主を信じ、歩めることに感謝です。

教会研修会報告 2016.10.23 於 コニファーいわびつ

10月23日(日)午後、『伝道』をテーマに教会研修会が行われました。日本のキリスト教会の教勢の推移、伝道についての概要、群馬地区の各教会の取り組みについての情報や学びを共有し、その後、小グループに分かれて意見交換を行いました。小グループごとに出された意見は、主に以下の通りです。

*教会学校(CS)に、こども達をどう招くかについては、各教会が直面している課題であることを知った。

*他教会の事例から、教会学校(CS)を一度閉じてしまうと、教会とこども達とのつながりが完全に途絶えてしまい、再開してもこども達が集まりにくくなる場合があることを知った。こどもを招くための何かしらの門戸は開いておく必要があるのかもしれない。

*土曜クラブが、こども達にとって、学校や家とは違う居場所となっている。教会ならではの、この交わりや雰囲気をごども達は求めている。

*伝道は、人と人との関係性をつくり出すことであると感じた。

*伝道を考えると、つい自分達の都合に合わせて考えてしまいがちなので、相手の思いを考えて行なっているかどうかを振り返ることも大切。

*キリスト者同士でかたまってしまいがちだが、私達の方から、地域に出ていって関係性を作り、仲良くなっていくことも大切。

*親がキリスト教信仰を持っていたから、受洗した訳ではない。信仰の継承は、やはり人の力ではなく、神の力に依るところが大きいのではないか。

*教会のなかに強制される雰囲気がなく、心安らぐものを感じられたことが、礼拝に出席しようと思う大きなきっかけとなった。

*教会を長期的に欠席していた時に、教会の週報やお知らせ等が送られてきていたことが、教会へ戻るきっかけを与えてくれた。

*クリスマス等の日本にも馴染んでいる行事や、教会に誘い易い行事等の時を大きな伝道の機会と捉えて、それに向けて力を集中させていくのも一つではないか。

*研修会の会場(コニファーいわびつ)について、使用時間に制限もあるため、礼拝後に教会で行なった方が出席者も増え、ゆっくり話し合えるのではないか。

研修会での交わりの時を感謝致します。この時が、主によって豊かに用いられますように。

